芸振

もくじ

ずいそう……1
昭和62年度を振り返って（グラビア）…2～3
（論　評）……4
加盟団体の活動……5
さざ波……6
豊の国文化創造県民会議からの報告……7
シリーズ会員通信③ わたしは今……7
事務局だより……8

大分県芸術文化振興会議
■発行人：挾間正年 ■編集人：後藤昭六
No.73　63・3

芸術文化活動の転機

大分県美術協会会長
仲町　謙吉

県美協を中心に、美術館建設の気運が高まり、その早期実現に大きな期待を燃したのは、昭和40年代始めの頃である。当時の松方コレクション展の鑑賞者の数からも県民が洗心の機会を渇望していたかがわかる気がする。それから約10年後（50年代始め）県立芸術会館（美術館部門とホール部門をもつ）の開館をみた。地理的条件や、展示室の展示面積の狭さなど問題はあったが、この開館は、大分県の芸術文化活動にとって一大転機となり飛躍の場となった。鑑賞の機会の増大、質の向上、作品資料の収集等、素晴しい事業の展開であった。それから10年が過ぎ厳しい現実となっている。収集作品の展示（常設展）例えば県展等（企画展）が同時に並行して開催はできないだけでなく、県展さえ狭く困難をきたしている。美術作品を保管する収蔵庫も限界で、根本的に考えなおす時がきている。そこで県民が、感動的鑑賞や、自主的な学習と発表・創作活動のできる美術館が必要である。鑑賞・収集・保管・研究・創作など多様な機能をもたせ、特に県民が美術創作活動に参加できる楽しい喜びや感動の場が必要であり、又一方、国際的・日本的な展覧会も開催できるように予算の確立も必要なことである。こうした充実した県立美術館を望みたい。

次の転機は昭和60年代である。昭和54年度から6年間の歳月をかけて、県費や寄付金を3億円積み立てた「大分県芸術文化基金」の完全実施されたことである。大分県芸術文化振興会議が、県内文化団体の連絡調整の役割から、基金運用の事業体となり、加盟団体の自主的な活動を奨励・援助し、県民による自由で創造的な、特色ある県民文化を振興する役割をもつことになった。その結果、各文化団体の事業は活性化し、地域で本物を鑑賞することのできる場の広がりができたり、県内文化活動の成果は目を見張るほど発展した。しかし、これとても、とりまく社会環境は厳しく、金利の低下はもろにその運用にひびいている。10年をくぎりに、飛躍し、展開した芸術文化活動も今こそ重要な時期を迎えている。今後は、「豊の国文化創造県民会議」の役割と共に芸振のいっそうの充実に期待したい。

（大分県芸術文化振興会議副会長）

（筆者のデッサン・観音菩薩像）

昭和62年度を振り返って

グラビア

①「今井俊満展」 4・14～5・5

②立見席の東京公演「もう一つのガラスの仮面」 7・25～26

③芸館開館10周年記念事業 三流派による新能（芸館） 8・6

④つみ木座「頭痛肩こり樋口一葉」 8・8

第1回豊っ子俳句大会（8・17）

伝統芸能大分代表訪中団の文化交流（5・11～5・18）

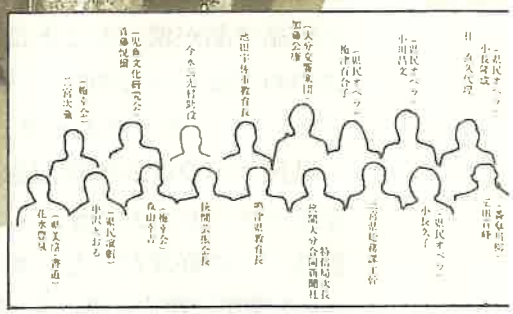
⑤豊の国文化創造県民会議の初会合 9・29

⑥「アート・スクランブル in ota」のシンポジウム（山香町三宮美術館） 11・22～23

写真1/2/3/4/5/6/7は大分合同新聞社提供

大分市少年少女合唱団 第5回定期演奏会（63・1・17）

第23回大分県芸術祭賞等贈呈式（12・17）



7

第2回おおいた音楽芸術週間　12・10

8

文化を語る夕べ　12・17

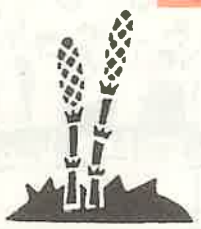
9

63・2・13～2・14

「豊予文化交流俳句の翼」の俳句会（松山市）

昭和62年度を振り返って

活発だった舞台芸術



大分県芸術文化振興会議理事
狭間　久

今年度の県下芸術文化界を振り返って感じるのは、際立って目立った動きはなかったが、着実に発展しているということである。

例えば県芸術祭は23回を迎え、123行事と、過去最高の20回記念の時と同じ数の参加があった。しかも総合部門で市町村の参加が大幅に増え、県芸術祭が県下各地へ浸透しつつあることを示した。今回は宇佐市で梅幸会の「豊の国・民謡の旅」が開幕を飾ったが、県芸術祭の開幕地方巡回も佐伯、日田に続いてすっかり定着したといえる。

主催行事では県民演劇の15周年記念「吉四六よＵＦＯに乗れ！」と県民オペラ20周年記念「フィガロの結婚」がそれぞれ節目を飾るにふさわしい公演だった。県民演劇は、今年度は創作ミュージカル「風待ち村の銀ぎつね」、民話劇「でれすけでんでんぴいひゃらこ」を７月に公演しておりその精力的活動は特記してよい。

演劇では劇団「つみ木座」が30周年を迎え「眠っちゃいけない子守歌」「いつか見た夏の思い出」「頭痛肩こり樋口一葉」を公演、「小袋丹一座」は20周年を迎え「金色夜叉」を３月に公演する。つみ木座や小袋丹一座、それに県民演劇の活動が県下の若い人を刺激してここ２、３年の若い人の演劇ブームを作り上げたが、そんな中で「立見席」が東京・原宿ラフォーレミュージアム・エスパスで「もう一つのガラスの仮面」を公演したことが注目される。この東京公演が評価されて、１月に東京の超一流の紀伊国屋ホールでの公演が決まったが、県下の演劇関係者の心ない電話で話が壊れたことは誠に残念だった。各劇団が競い合うのはよいが、足の引っ張り合いはやめてほしいものだ。「吉祥じゅん＆ワルキューレ」「プロデュースＭ」「ハナマル・ファクトリー」「トップ・クオーク」など若い劇団の活動も目立った。

県民オペラは20周年記念に初心にかえって「フィガロ……」を公演したが、若いフレッシュなキャストがさわやかだった。音楽では７月に日本国際音楽コンクール特別演奏会が開かれ、意外(？)に好評だった。おおいた音楽芸術週間も２回目を迎え定着した感じで、クラシックファンを着実に増やしている。特に、今回初の佐伯公演が1,300人の聴衆を集めたのは驚きですらあった。園田高弘賞ピアノコンクールは今回から九州全域を対象にするようになり、こちらも着実に発展している。

美術では４月から５月にかけての「今井俊満展」が現代美術では空前の１万１千余の観覧者があった。県美展では写真部が初の会員展を８月に開いた。10周年を迎えた芸術会館が「明清絵画展」と「日本近代洋画の歩み展」を開いたのも収穫だった。芸館の県在住作家の個展シリーズは10年目を迎え打ち切られ、来年度は現代美術の新企画に取り組む。個展では熊井恭子展が圧巻だった。「豊の国文化創造県民会議」が９月に発足、21世紀へ向けた新しい県民文化創造に取り組むことになった。

（大分合同新聞社特信局次長兼文化部長）

加盟団体の活動

＝ 武蔵町文化協会 ＝

心の豊かさを求めて

――中央公民館セントラルホールを拠点に――

「人生にうるおい」を願いながら芸術文化振興会議と年を同じくして生まれた。この町の文化活動にくらべて、大分県の芸術文化活動は、近年めざましい発展をみている。県民演劇、県民オペラ、バレーなど年々充実したものになっていることは、我々大分県民にとって、まことにうれしいことである。

武蔵町においても、絵画・書道・俳句・短歌・生花・盆栽・民踊の7部門120名で発足したこの会も諸先輩のよき指導をうけながら会員も年々増加している。

また、昭和40年11月統合中学校の祝賀記念行事の中で開催した、第1回の合同発表会以来毎年開催している産業文化祭にも参加してきた。

当文化協会も今年で24年を迎えており、現在、手芸・民謡・音楽等を加え12部門350名の会員となっている。

その活動は地道ではあるが、長年の努力のあとがうかがえる。人にはそれぞれ、度合いの差こそあれ、芸術への関心、素質を兼ね備えている。そして、そこに住み、そこで働く人々の才能を何よりも大事にしなければならないと考えている。

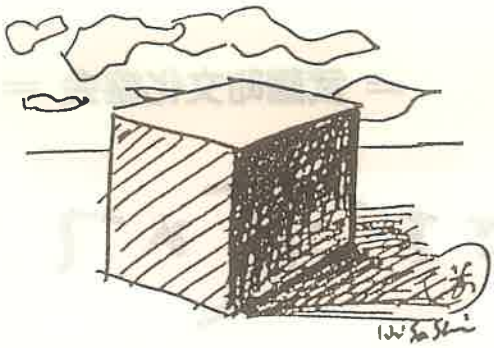
武蔵町民多年の念願であった中央公民館セントラルホールが61年11月完成した。この施設は文化活動の殿堂として、また、23区の自治公民館の拠点として、町民の各種サークル、学習、芸術の振興など、文化の香り高い町づくりに寄与している。このホールのこけら落しで、県民演劇の民話劇「でれすけでんでんぴいひゃらこ」が上演されホール満員の600人の観衆に深い感銘と共感を与えてくれたのは記憶に新しい。

今後は各地域、それぞれの文化的風土と特色をもっていることを再評価しながら、更に一つの輪として結合することを考えて、文化協会の再編成をしたいと考えているところである。

それと同時に、武蔵町の芸術文化活動の定着をはかりながら、「心と物の豊かな夢多きまちづくり」推進の一翼を担えればと思うものである。

（武蔵町文化協会）

武蔵町絵画展（中央公民館）



いま大分市立美術館構想が話題になっている。大分合同新聞によれば63年度に基本設計し、予算は数10億の規模で64年度をメドに着工したいとしている。県立芸術会館は設立11年目を迎えたが、開館時からその場所や広さが問題とされてきた。しかしそれを補うものは学芸員による熱心な調査研究と企画展。同時に県下唯一の県立美術館として利用する県民の協力があったからで、特に県美協はじめ地元報道機関の後援は大きい。それでも近年は手狭になった館の拡張を切望する声がしきり。この時発表された大分市長の市立美術館構想は当を得たもので、市民県民に大きな夢を与えたといえる。

そこで一番大事なことはどんなねらいをもつ美術館にするかということである。いずれにしても、すでにある県立芸館と協調することが県文化を育てることであり、市の文化を高めることになる。したがって市立美術館は芸館が進めてきた県美術史を中心とするタテを見せる美術館と対照に、ヨコを広げる美術館とすること。すなわち現代美術の貸館業務とその企画展専門館とし、付属美術図書館や学校教育や社会教育と直結したアトリエを完備して〝いま〟を追求する『大分市立現代美術センター』とすることが望ましい。

そのためには、建設位置が県病跡地のような市街中心部であること。展示壁面は芸館の二倍以上が必要。県美展や市美展の地元美術展と同時に、福岡県まできている団体展や現代国際展が常に鑑賞できる美術センターであってほしい。そしてその暁には、東九州美術ビエンナーレとか高山辰雄大賞展とか書道や写真のジャンルにおいても全国規模のコンクールを企画して、現代美術の目を大分市に向けることが必要であると思う。

大分市は早く専門員をつくり、地元美術家や市民の声を聞いた上で理念の決定を急がなくてはならない。建築設計者だけにまかせず、全国美術館会議に加入して研究し、外観もさることながら内部の機能的なデザインを重視すること。特に表に出ない部分が美術館の生命を決めるといわれている。

先般故あって光琳の国宝「紅梅白梅図」がある施設設備日本一の熱海「ＭＯＡ美術館」を見学したが、贅（ぜい）をつくした建築のすばらしさには目を見張るものがあった。大分市立美術館にかける夢も大きくふくらむ。（カットは筆者）

（二紀会会員、芸振常任理事）

豊の国 文化創造県民会議からの報告

第２回豊の国文化創造県民会議

豊の国文化創造県民会議は、昨年９月29日大分市で第１回会議が開かれ「21世紀豊の国文化創造懇話会」の提言を具体化するための方向性などが話し合われた。

引き続き第２回が11月26日湯布院町で、また、去る２月３日には、第３回の会議が大分市で開催された。第２回会議では、30項目の提言の中から実現可能なものを１位から３位まで優先順位をつけ、各委員に意見発表の形で報告してもらいその内容検討を行った。

主な項目としては、「公的文化施設の整備」や「人材育成」などが多かった。

第３回では、これらの多かった意見の中から具体的に実現可能なものを絞り込む予定だったが意見がまとまらず次回へ持ち込まれた。

なお、３月に開からる第４回では、検討課題の絞り込みと同時に、今年10月に予定されている中間報告のための起草委員を選出する予定となっている。

（山村憲治）

新シリーズ③
会員通信

わたしは、今

私のシルクロード

樋口　愁枯

真冬の深夜、国道210号線をめざして、大分市内を抜け出す。医大前から庄内にかかる頃にはいつの間にか連れの車も横道に外れる。

湯布院から愈々山道にかかる。ちらつく小雪を気にしながら水分峠に向って走る。上れば上る程風も雪もはげしく窓を打つ。ワイパーをしげく作動しながら、ようやく峠に着いた時やっと我に返る。

こんな夜、何故か野兎が道路わきから急に飛び出しては、２～30メートル車を先導しては、ヒョイと藪に飛びこむ。また、親子連れの猪の一団が悠々と道路をまたぐこともあった。

暖冬の今年は、峠越えにさ程困まることも少なかったのは幸いだった。

合同作品創りの練習を終わっての帰り道、創る喜びが実感となって、興奮状態で目が冴える。

芸術だ、文化だ、やれ本物とは、と、明日への期待をかけて家路につく。大分への道、210号ルートは、私の芸振への道であり、それはまた私のシルクロードでもある。

（県洋舞踊協会長、芸振会議理事）

●実物はタテ5.3cm、ヨコ8.5cm

シンボルマークについて

大分県の(O)と芸術文化の(G)をモチーフにデザイン
将来の発展性と円滑な運営を端的にシンボライズしたもの
大分県宣伝美術会長（芸振会議理事）　波多野義孝

できました会員証

芸振会議では、組織を十分に意識して、会員相互の心の交流と共に他のジャンルの芸術文化も理解してもらうため、会員証の製作を決め、芸振のシンボルマークをあしらったプラスチック製の会員証（左の図）が、このほどでき上がった。

この会員証は、

1．この証で、本会指定の催しに入場できる
2．有効期間は、発行年度を含め２か年度
3．この証は、記名本人以外は使用不可

なお、会員証交付は、会費納入と同時に行う。

チャンネル芸振

事務局だより

基金運営協議会の新委員決まる

芸術文化基金事業の円滑な計画運営を図るため、芸振会議会長の諮問機関として設置されている基金運営協議会の新しい委員が、下表のとおり決まった。

そして、去る３月15日、昭和62年度の基金運営協議会が開かれ、63年度の事業概要などについての審議が行われ、諮問どおり答申が行われた。

大分県芸術文化振興会議基金運営協議会委員

	現　　職	氏　名
学識経験者	大分県小中学校長会協議会会長	佐藤真一
〃	大分経済同友会代表幹事	小尾知愛
〃	大分県商工会議所連合会会頭	吉村益次
〃	大分合同新聞社常務取締役	田中康生
〃	国際ソロプチミスト大分会長	田北文子
〃	県立芸術会館館長	藤井義美
〃	県立芸術短期大学学長	井上誠治
〃	大分県中小企業団体中央会会長	菅原　茂
行政関係	大分県総務部長	橋本　晃
〃	大分県教育委員会教育長	嶋津文雄

（任期＝昭和63年３月１日～昭和65年２月28日）

海外派遣の林さん東ドイツへ出発

昭和62年度の基金事業＝海外派遣研修事業は、グループＵＮＯの林フミヨさんに決定していたが、去る２月29日に東ベルリンの『ハンス・アイスレル大学』で３か月間の研修をうけるため東ドイツへ向け出発した。研修テーマは、バロック音楽におけるフルート奏法となっている。（写真は　林フミヨさん）

個人会員、大挙入会

それぞれの文化団体や、その責任者に芸振会議への入会（団体・個人会員）を呼びかけていたが、昨年12月17日の理事会で新規申込みのあった日本民謡梅幸会の森山幸吉氏など20人が万場一致で承認され、新たな会員となった。

なお、会員ナンバーは、これまで50音順であったものを89番からは、入会順とする。このため、退会された場合は欠番となる。

会員番号	氏　名	住　所	電話
89	熊井　恭子		
90	安部　森之		
91	麻生　和江		
92	山本　恭正		
93	佐藤　俊峰		
94	佐藤眞砂延		
95	森山　幸吉		
96	矢田　芳子		
97	菊水　秀芳		
98	村岡　嵯一		
99	片山　真一		
100	赤嶺　洋子		
101	糸永　信義		
102	吉野　昭典		
103	嵯峨　信一		
104	熊井　惇		
105	斉藤　哲哉		
106	加藤　公康		
107	佐藤　京子		
108	末広　小華		

（　）はジャンル別

発行：大分県芸術文化振興会議＊編集・野田産業＊印刷・興成林社